

洋風住宅に投影されたプロテスタントの家庭光景

川崎 衿子

一 はじめに

一八五四年、約二二〇年間におよぶ鎖国体制が廃止された。それに続く一八六八年の明治新政府の成立とともに、時の政府は急速な西欧主義を掲げ新しい社会構築の規範を西欧諸国に求めた。堰を切ったように広まった西洋文化への傾倒は上流社会からやがて一般社会へと拡大し、大正期には多くの分野で洋風化が進行した。本来、政治的・社会的運動から出発した大正デモクラシーの思想は、それだけにとどまらず人々に閉塞的な旧来の価値観からの脱却を促し、自由主義や個人主義の目を開かせ人道主義、文化主義に基づく新価値観を芽生えさせた。

明治期以来の国家主義的家族観、封建的な生活構造、生活意識からの解放を求めて洋風生活に思いを馳せることは、同時に

その底流にあるキリスト教に基づく西洋近代の精神を受容する動きでもあった。この大正デモクラシーといわれる時流を背景にして生活改善を唱える新しいメディアが生まれ、さらに公的機関先導による生活改善運動、啓蒙活動の数々が活発化し、洋風の生活様式に人々の関心が集まった。多方面から提示された具体的な住宅改良の提案は、日本の住宅および住生活の近代化、合理化に大きな足跡を残したとされる。

この時期にプロテスタンティズムを立脚点に住宅理念を掲げ住宅設計・住宅建設・住宅販売を試みた近似の背景をもつ三人の人物が同時に存在した。

橋口信助 一八七〇（明治三）年生まれ。

一九〇九（明治四二）年、アメリカの住宅を手本として設計・施工するわが国最初の住宅専門会社「あめりか

「屋」を設立した。

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ 一八八〇（明治一三）年生まれ。
れ。

一九〇五（明治三八）年宣教師として来日。一九〇七（明治四〇）年に「近江ミッション」を設立、建築設計業を開始する。伝道活動とともに数多くの洋風住宅を設計したアメリカ人建築家。

西村伊作 一八八四（明治一七）年生まれ。

一九〇八（明治四二）年、和歌山県新宮市に最初の自邸を建て建築設計を始める。自ら洋式生活を実践し理想生活を提唱した。一九二一（大正一〇）年、文化学院を設立した。

彼らは共通して伝統的日本住宅のあり方や住まい方を前近代的な因習と指摘した。さらに新時代に相応しい人間形成を望むには、住宅の変革が優先課題であるとして、そのモデルをアメリカの住宅の中に見出した。ヴォーリズは宣教師として彼自身が先進性を誇るアメリカ生活の紹介者であったが、他の二人は居留地の欧米人や宣教師の生活光景に強い憧憬と羨望を抱いた経験を出発点としている。三人の出自や本拠地、活動目標、実践方法はそれぞれ異なるもの、いずれもキリスト教プロテスタント精神やそれへの傾倒が住宅設計の視点となっている。

本稿では、洋風住宅並びに洋式生活浸透の過程にみられたプロテスタントの思考・行動や宣教師の活動から、その特徴を捉え同時代に生きた前記三人の実践を比較考察した。

二 橋口信助と「あめりか屋」

（一）「あめりか屋」の設立

橋口信助は木材業を営む父のもと、一八七〇（明治三）年宮崎県に生まれた。跡取りとして家業に従事し二四歳で結婚した。しかし事業の失敗から故郷を離れ単身で上京し、やがてアメリカ移民を決心することとなる。一九〇一（明治三四）年頃にはシアトルに居を定め、その間いくつものアメリカ人家庭の使用人として働く生活を続けた。この経験は後に橋口が住宅を設計する際に生かされ、実際に住宅を使う立場から考える態度をつくりあげたといわれる。

ほどなくして、シアトルでの使用人生活から脱却し日本人相手の中古服店を開いた。商売は繁盛し、次第に事業も拡大していった。しかし折悪しく起こった日本人労働者排斥運動の余波を受け一九〇九（明治四二）年には帰国せざるを得なくなったが、同時に日本での新たな事業構想を生みだしていた。アメリカでの実体験から、彼はこれからの日本人の理想生活達成のためにはアメリカ住宅の普及が最善と考えてアメリカ住宅の輸入を試み、商品販路を開拓して普及を図った。

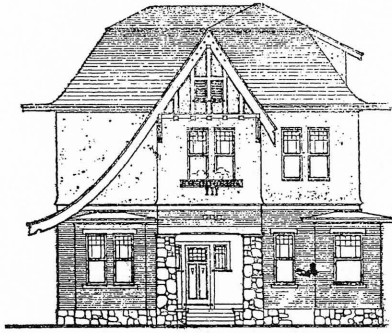
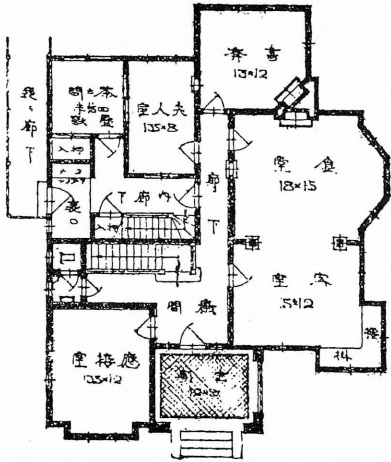


圖 建面正



面 平 階 一

図1 某氏邸 設計あめりか屋『住宅』1917
(大正6)年11月号より

シアトルの商店や財産を処分して事業資金を調達、現地の組み立て住宅(プレハブ住宅・ツーバイフォー工法)と建築金物、建材などを仕入れ、東京・芝に屋号を「あめりか屋」と名乗る住宅・家具販売会社を起こした。一時期売れ行き不振に悩むこともあったが、彼の意欲に賛同する建築界の有力者の支援も得て、「あめりか屋」は洋風住宅専門の設計施工会社としてその名を知られることとなった。彼の理想とした住宅は、機能的な間取りと近代設備を備え、椅子式の起居様式で暮らすアメリカの中流階級の住宅そのものであった。食堂、居間、厨房、客室は家族全員が共通に使う開放された場であるとともに、社会に対しても開かれた性格をもつべきであるとした。個人にはそれぞれに寝室を設けて家庭生活の楽しさや個人の尊重が平面図上からも明快に感じられる住宅を推奨した。

鮮烈な彼の洋風住宅推進論は、知識人・文化人の提唱する人間解放、個性尊重、人道主義を基盤とした自由主義思想とも同調した。従来にはない新規事業は新しい家庭建設の規範を求めるメディアにも歓迎された。その一つが羽仁もと子・吉一夫妻により発行されていた『婦人之友』であった。

(二) 新しい家庭をつくる新しい住宅

橋口の住宅論を掲載した『婦人之友』はキリスト教精神に基づいた男女の敬愛と相互協力による家庭建設や家庭生活の合理化をめざしていた。

少し時代は遡るが、近代国家への道を急ぐわが国にとって議会制度や近代法体系の確立は重要課題であった。またそれと並んで当時の一夫多妻もありえた武士型家族関係を改め、一夫一婦制を確立することも政治課題の一つであった。この背景にある封建的女性観に変革を与え、近代的家庭像を先導したのがキリスト教の女性観と女子教育の発達であった。キリスト教主義の女子教育機関が男女平等観に立脚し、キリスト教を通した人格主義による女性観を培い、家庭経営という新しい領域を開き、女性の自意識を覚醒させたことは、わが国の女性史上革新的な意味をもつものとされる。

一八八五（明治一八）年巖本善治（一八六三—一九四二）らが発起人となり開学された「明治女学校」は、キリスト教を基礎にした日本人による理想主義、人道主義の学校として注目された。また巖本は『女学雑誌』を発刊して最先端の思潮を世に送り出し、婦人解放論を唱え、矯風運動、廃娼運動にも取り組んだ明治二〇年代の代表的知識人でもあった。巖本の思想に啓発され、旧来の価値観に嫌悪感を示し、西洋文化の薫りに曙光を見出したのは『女学雑誌』の読者であり、おもには都市の中間層に属する女性たちであった。またそれに引かれて集まった「明治女学校」の生徒たちであった。

その一人に羽仁もと子（一八七三—一九五七）がいた。彼女は青森県に生まれ、東京府立第一高等女学校に入学、在学中にキリスト教に出会い受洗した。さらに一八九一（明治二四）年に明治女学校に入学して巖本の教えを受けた。後に日本初の女性新聞記者となつて活躍、結婚後に夫とともに『婦人之友』を発行した。一九二一（大正一〇）年には自己の理念を実現した「自由学園」を創設した。理想追求の姿勢を貫いて学校を開き、メディアと教育の両面から近代家族の概念、合理的家庭経営の普及に努めた点では巖本思想の正統的継承者といわれる。

羽仁もと子の唱えた「平民的家庭論」の根底にあるものは、斉藤道子によれば「理想に向けて努力する勤勉と、そのために不要な時間や精力を浪費しない合理性と、不合理な消費を抑制する禁欲的態

度であるといえよう。そして、これは単に平民主義の継承というにとどまらず、彼女のキリスト教信仰から導き出されたものであった。彼女の内面からつき動かして、合理主義に基づく自覚的家庭経営へとむかわせたものは、実はプロテスタントの信仰であった」といわれるキリスト教精神であった。

『婦人之友』明治四五年四月号の「中流の衣食住特集」には、一般家庭の理想型が示されたいるが、洋服を推奨し、「住」の項では個室の重要性を述べて椅子式生活を提案している。なぜ椅子式を推奨するのか、特に食卓の光景をなぜ変えようとするのかについて、斉藤はこうも述べている。「当時の日本には食卓を囲んで一家団らの風はなかったので彼女は欧米人が食事には家人が身なりをととのえて集まり、質素ながらも美しく盛り付けて楽しく食事する様をたびたび紹介している。それは家長中心の生活様式を変えてゆく一つの試みでもあった」生活の洋風化によって与えられる感化に着目し、家庭を起居様式から変えようとする試みがなされた。新しい住まい方を導入することによって得られる精神効果に大きな期待を寄せていたことが解る。

橋口信助がアメリカ住宅やアメリカ人の生活様式をわが国に取り入れるべきだとする論調はまさに『婦人之友』が求めた理想と重なった。伝承的な在来住宅を批判し、椅子式生活を推奨する動きは明治三〇年代から現れてはいたが、それらは主として建築設計・住宅

設計の専門家間の論争や提案であった。一方『婦人之友』は読者のための実際的な新しい家庭生活像の啓蒙であり、生活改善の指導書でもあった。キリスト教思想を背景にした欧米の人間観、家庭観、社会観は人々に生活環境改善の必然性を自覚させ、同時に衣・食・住にわたる洋風化を啓蒙し、有用な実用的知識の供給源として多くの読者層を集めた。

クリスチャンでもある橋口は同誌に共鳴して多くを寄稿し、実際的な住宅を提案し宣伝も多く行った。⁽⁷⁾「あめりか屋」の屋号の響きから感じられる洋風文化の雰囲気、ハイカラな先進性やキリスト教に導かれる知性への憧憬は『婦人之友』がもつ独特の雰囲気と融合して相互に洋式生活推進の誘いとなった。

新しい家庭をつくるための新しい住宅に対する試みは、この時期に相呼応しながら時代の教養を先導して豊かな果実を実らせた。

三 ヴォーリズの伝道した住宅

(一) ミッション住宅への羨望と憧憬

一九〇五(明治三八)年、ウィリアム・メレル・ヴォーリズはY M C Aから派遣されて来日、ただちに近江八幡にある滋賀県立商業学校に英語教師として赴任した。放課後バイブルクラスを開き青年たちの感化を試み彼らの敬愛を集めたが、やがてそれは土地の仏教派との対立を生んだ。その結果赴任二年後には解雇されることとな

ったが、それを契機として教え子の吉田悦蔵とともに伝道団「近江ミッション」を立ち上げた。

一九〇七(明治四〇)年に創設された「近江ミッション」は資金もなく、経済的に逼迫した状況が続いた。伝道資金を調達するため、ヴォーリズは大学時代に得たわずかな知識をもとに建築設計を始めた。最初は零細ではあったが、やがて軌道に乗り始め一九一〇(明治四三)年にはヴォーリズ合名会社を設立するまでに発展し、建築設計業はミッションを支える経済的基盤となった。

一九一二(大正元)年、八幡の西・池田町に一〇〇〇坪の土地を獲得してミッションの中核となる住宅群が計画された。そこにヴォーリズ、吉田悦蔵の住宅をはじめ主だった宣教師たちのために住宅四棟が建設された。古い町並みが続く八幡の町の一角にひととき異彩を放つヴォーリズ設計によるアメリカの町が出現した。⁽⁸⁾ ミッション関係者の往来も増え、ここを拠点にミッションの地盤が名実ともに固められた。アメリカ直輸入の設備、家具調度品、内外装材は瞳目に値し見学者は引きも切らず訪れ、この住宅群はヴォーリズの住宅設計を実際に体験できるモデルハウスの役目も果たした。

宣教師ウォーターハウス夫人は、この自邸で西洋料理教室を開き、また吉田悦蔵の妻・清野も同じように自邸で西洋料理教室を開設した。アメリカの生活様式を移入したこれらの住宅が醸し出す雰囲気は、羨望と憧憬の的ともなり大正期の進歩的な思潮を知った女性た

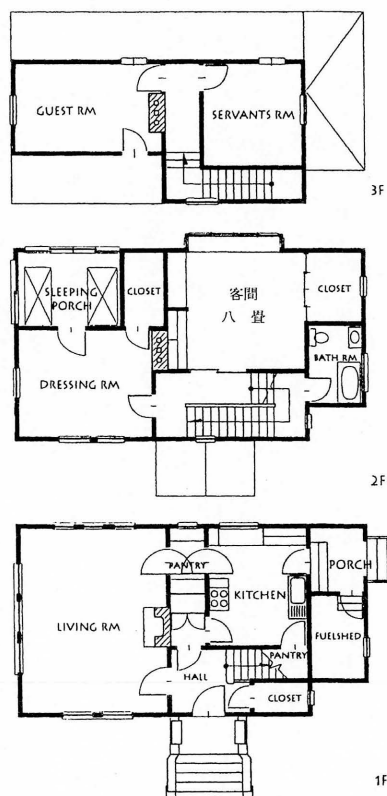


図2 建設当初の吉田邸平面図 1913（大正2）年（筆者作成）

ちを引きつけるに十分な条件を満たしていた。地元はもとより大津や京都からも評判を聞いて通う生徒たちで賑わった。

清野は単に西洋料理を教えただけでなく、吉田家の家庭そのものの全部を教材とし、家政・家事一般や思考・行動の規範までを教えた。自邸を開放してキリスト教精神に従った暮らし方、道徳観、生き方の手本を示し、生徒たち自らが新しい生活様式に実際にふれることによって実践的な生活改善の担い手になることを期待した。洋風住宅はキリスト教伝道に絶好の環境を整える手段として効果的に利用された。

これらの住宅以降、ヴォーリズには住宅設計の注文が相次ぎ、建築設計事業は近江ミッションの伝道活動を支える大きな力となった。建築を伝道手段として考えたその意図について、ヴォーリズ建築研

究の碩学山形政昭は次のように述べている。「彼の伝道は教会に閉じこもることではなかった。そのため近江ミッションは八幡でも自派の教会を興すことはなく、あくまでも超教派の汎プロテスタンティズムを通し、教育や医療という方法で直接クリスチャン・ヒューマニズムを浸透させることが近江ミッションの伝道そのものであった。そして具体的イメージを直接呼び起こすのに効果的な『建築』を最大限に活用した。だからして、ヴォーリズにとっての建築は伝道活動のたんなる資金源だったのではなく、西洋館によるユートピアづくりそのものを伝道と考えていたのである」⁽⁹⁾

(二) ヴォーリズの描いた理想の家庭

ヴォーリズの住宅論は一九二三（大正一二）年に発行された『吾家の設計』とその続編として一九二四（大正一三）年発行の『吾家の設備』によって明らかにされている。両著書とも彼の講演をもとに加筆されたもので、洋風住宅を正しく理解するための指導書と云ってよいであろう。

時はまさに大正デモクラシー、ヴォーリズは時流に乗り洋風住宅の推進者としての評価を得ることができた。彼自身は設計方法や細部にこだわるよりも、むしろ理想の家庭像や西洋的生活の真髓紹介を得意とした。彼自身が育った環境を思い起こし、彼が生来具備し

ている生活信条をそのまま住宅設計に反映させれば、それらは日本の住宅の「これからのモデル」になりえた。したがってヴォーリズが住宅を語る口調は気張るところなく自然で平明であり、教導者としての自信と誇りに溢れている。

ヴォーリズの住宅が内包する生活意識、生活信条をより鮮明に表しているのが長期にわたって『湖畔の聲』に連載された「吾家の生活」⁽¹¹⁾である。ヴォーリズがとりわけ重要視したのは食生活である。

家庭の中心は台所や食卓まわりであることを力説し、台所仕事は女の仕事であるとした当時の一般的な意識に対して嫌悪感を示し、次のように述べている。

「食物の問題は婦人同様、男子もその未婚、既婚を問わず、大いに研究すべき大切な事柄である」そして「その関する所ただ一個人の身体の栄養問題のみではない。(中略)さらにその精神状態を左右され、進んでは道徳上憂うべき結果をもたらすものである。家政経済上の一問題であると同時に道徳上、また教育上の問題として考えてもよいと思う」⁽¹²⁾。また別稿では「立派な応接室を持ち、そこでは礼儀作法をやかましく強いていながら、一方台所へ足を踏み入れてみると、昔ながらの悪習にとらわれて、何ら頭にかけて平気でやっているというのが多くの家庭の実際である」⁽¹³⁾と女性の地位の低さを象徴するかのような薄暗くて寒い台所、貧弱で非能率的、前近代的な台所を批判している。

台所のあり方は当然主婦の家庭経営能力にもおよび、何事にも「家」の背後に逃げ込む女性の姿勢は子どもの人格形成に悪影響を及ぼし、理的で教養的な家庭は生まれないと憂慮している。

食堂の機能については次のように述べている。「一家団らんたる家族生活、これが食堂の生命である。(中略)食堂は家庭教育の一実験室となるべきである」そして食卓では男女長幼の区別なく一同揃って一卓につき、そこで語られる言葉はそばで聞く子ども達のためになるようであればならない。そして「子供達に食卓についての正しい振る舞い方、社交場の礼儀作法を習わす為には、一年の中に何度か来客用の食事を食べさす必要がある」⁽¹⁴⁾としている。家庭を閉鎖的にせず社会を受容することを是とする彼の主張はさらに強調される。富めるものも貧しいものも等しく食卓に向かいご馳走を食べる喜びを共有する。その意味するところは「食堂をかく用いてこそ、吾々自身として獲る所大なるものがある。時にはその中に磨きこそ未だかかっていないが天稟玉質の偉人を見出して驚くこともあろう。知らずして天の使いをもてなすこともあろう。(中略)自分の子供等に、常に己が事のみを考えずに、寛容であり、親切であり、偏見なく人の為を思う天与の善美の性質を益々発達せしめる金銭では買い難き尊き機会を与えるものである」⁽¹⁵⁾と述べ、ヴォーリズは理想の家庭からつくられる食卓の光景に善美を求めた。

(三) 個性の尊重と子ども部屋

子どもの生活を重視するヴォーリズの主張は「子供ほど大事なものはありません。ともすれば子供なんかどうでもいいと放って置くのは、無自覚な野蛮時代のことです。文化生活に於いては、子供の寝室ばかりではなく、昼使う部屋、子供の養育のためにする部屋を考えてやらねばならぬ。台所と寝室があれば家です。けれどもホームと家は違います⁽¹⁶⁾」にみられるように、ホームを完全にするならば、家族のためには環境に恵まれた居心地のよい場所をあてがい、子どもには独立した部屋を用意してプライバシーを保障すべきとしている。そのような環境は子どもの独立心を育て責任感を発達させ、知識の面でも道徳の面でも、また情緒の面でも望ましい発達を促すものとしてゐる。

家父長制の残る日本の住居観のもとでは、個人がとりわけ子どもが占有空間をもつという意識は未発達であった。封建的な家族観に拘束されていた個人を家意識から解放し、子どもであっても人格を認めようとする意識、そしてそれを明確化するための「個室」は個人や個性尊重の象徴的存在であった。

子ども部屋計画に対するヴォーリズの熱意は「子ども中心の家」の中で集約されている。部分的に抽出してみると、男女ともに個室が望ましいこと、子どもの教養育成のためには全家族が集うことのできる居間が必要であること、子どもの道具・必要品のための収納

を充実させること、そして必要以上のものや数を与えてはいけないこと、戸外にも日当たりのよい安全な遊び場を用意すること、幼少の頃から部屋の家具を細心の注意を払って取り扱い、家族それぞれの所有物を尊重する態度を教えること、さらには一日一回は家族一同が揃って食事をする⁽¹⁷⁾ことが子どもの心身の成長に必要であること、などが記されている。

このような子どもへの眼差しを理解するにはプロテスタントの家庭教育にふれなければならない。宗教教育学の観点から安達寿孝は、ジョージ・コー⁽¹⁸⁾ (George A. Coe 1862-1951) が示した具体的な家庭教育論を引いて、その実践から子どもは自然にキリスト教を感得し、家庭の雰囲気から一層の信仰心が深められるとしている。

キリスト教的な家庭を築くためにコーの示した具体策とは、以下のように列挙される。「(一) 男女が不平等という思想や実践を廃止すること。(二) グループ生活へ参与する能力をより発達させる。

(三) 共同体の生活維持のために限定された規則的な個人奉仕を行う。(四) 各人が主導権を発揮できる生活領域を定める。(五) 家族が共有できる楽しみの機会により、民主制が促進できること。(六) 建設的な社会事業への参画を通して家庭と社会の関係を認識すること。(七) 所有物の個人化により個人の責任を学ぶこと⁽¹⁹⁾」

プロテスタントの家庭教育は共通して両親との密接な生活から育まれる子どもの発達を念頭におき、住宅が子どもの心身に与える作

用を認識していたことが認められる。

四 西村伊作の西洋風の家

(一) 西村家の家庭生活

西村伊作は一八八四（明治一七）年に和歌山県・新宮で、名家といわれるクリスチャンの家庭に生まれた。伊作の父・大石余平は学者の家系を受け継いで勉学には非常に熱心であった。妹を大阪の梅花女学校に入学させ、続いて弟・誠之介も京都同志社英学校に学ばせ、弟妹を通して余平自身の洋学への傾倒、教育に対する切望は満たされていた。

妹が帰省の折に持ち帰った聖書を読み触発された余平はキリスト教に対して積極的な行動をおこし、一八八三（明治一六）年には初めての宣教師を新宮に招き入れた²⁰。洗礼を受けキリスト教徒となった余平は、信仰心から生活の断片のみならず衣食住のすべてにおいて宣教師の生活様式の模倣を始めた。

一八八四（明治一七）年、伊作が生まれる直前に余平は新宮に教会を建てた。余平は子どもたちに洋服を着せ、食事は家族揃って一つの食卓でとった。伊作は父の理想どおり西洋式にすなわち宗教的に育てられ、西洋模倣の生活環境の中で幼少期を過ごした。この原体験が後に伊作の西洋文化に対する自己同化性を形成していったことは想像に難くない。

この後大石一家は、移り住んでいた愛知県で一八九一（明治二四）年に起きた濃尾地震に遭遇し、不幸にして余平夫妻は亡くなり伊作は母の実家に引き取られて西村家を継ぐこととなった。

一八九五（明治二八）年、父・余平の弟・大石誠之介が五年の遊学を終えてアメリカから帰国した。誠之介は余平の遺児の養育に強い責任を感じ、ことのほか伊作に目をかけ自宅に同居させて面倒をみた。伊作はこの叔父から多くのことを学んだ。幼少期に両親のもとで洋式生活を体験した記憶は誠之介との生活で過去から呼び戻されて、伊作を極端ともいえる「西洋かぶれ」へと走らせた。洋食に凝り、特別の洋服を仕立て、英語を習い、さらには西洋人のように靴を脱がない生活を断行しようともした。

二人が共鳴しながら歩んだ夢の世界も次第に陰りを帯びてくる。大石誠之介は、やがて思想的に先鋭化し革命を先導する社会主義者となり、その結果大逆事件に関わった廉で一九一一（明治四四）年死刑に処せられてしまう。

伊作はシンガポールでの海外生活経験を経て、一九〇七（明治四〇）年に二三歳で結婚、理想の家庭建設に向かって邁進した。思い出の中に残る幼少時代の理想郷を再現させるがごとく妻に西洋人の教養を求め、西洋料理、西洋洗濯、西洋家事や英語を教え込んだ。「伊作は生活の西洋化を西洋の『システムを取り入れる』と表現した。単に西洋の事物を断片的に取り入れるのではなく、彼は初めか

ら生活全体の雰囲気や西洋的なものに変えることを意図していた」⁽²¹⁾ようにあくまでも洋式に生活することに強く執着した。

また「私は子供の時から西洋風の家が大好きでした。大きくなったら屹度、ああ云う家に住みたい、白いテーブルクロスを掛けた食卓に美しい花を生けて、楽しい食事をしよう。軒には蔓草でああ云う風に緑の日覆いを作らう。カナリアの籠のかかった窓から白いレースの窓かけを通して日光が射し込んで居る家に住みたい、などと思ひました。西洋の美しいクリスマスカードなんかある綺麗な家の繪を見たり、或は西洋人の住家の傍に立停まって、羨ましさうにそれをながめたりした度に、私の年若い心が踊るのでした。(中略)

また私は少年の時、時々宣教師などの家へ行ったりして、西洋人が日本風の家を借りて、それに手際よくカーテンやクッションやスカーフを用い、巧に椅子やテーブルと日本家とを調和させて、気もちのよいサッパリした生活をして居るのを見て、その囚われて居ない、自由な、楽しさうな住み方を感じしたものです⁽²²⁾と、洋式生活に魅了された彼の家庭生活の原点は幼い日の思い出であった。

少年・伊作を虜にした西洋人の住まい方は、クリスマスチャン・ホームのスタイルであった。本国でのクリスマスチャン・ホームは、その精神性と同様にその家の具体的な「見かけ」も重要であった。敬虔なキリスト教徒が住む家は信仰や教養の証として形式からその存在を整えるべきだとされた。「簡素で清潔な佇まい、磨きのかかった白

壁、優美で控え目な心遣いを感じさせるフルル付きのカーテン、花の絶えない庭先などである。クリスマスチャンホームの外形はたとえ大都会にあっても、どこかしら農村的な小世界の秩序を表現することが理想とされた⁽²³⁾。

追憶の彼方にある両親を敬慕して郷愁の思いを募らせる伊作の気持ちは次の記述から窺い知ることができる。「私は習慣を破って新しい試みをして居るやうだが、實は親の後継を續けて居るだけなのであります。然し私は親のした程に熱烈に生活の革新を為し續けて行く力はないと思ひますが……」と懐古の中に揺るぎない価値観が存在している。

(二) 新宮の家

結婚八年後の一九一五(大正四)年に何度目かの自宅を新宮町・伊佐田に建設した。経済的に不自由のない暮らしの中で彼は幾度となく自宅建築を繰り返していたが、この住宅はアメリカの家庭雑誌からの情報を駆使し、アメリカの家庭生活研究の結果生み出されたものであった。設備機器や家具調度品をアメリカから取り寄せ当時としては超近代的ともいえる住宅を大都市から離れた新宮の町に出現させた。まるで外国に來たようだと驚嘆され、誰もが目を見張った。折りからヴォーリズが近江八幡の池田町にミッション住宅を次々と建設していく時期と重なった。

この家に伊作は多くの知識人・文化人を招いた。このサロンで歌人と謝野寛・晶子夫妻、画家・石井柏亭、彫刻家・保田龍門、陶芸家・富本憲吉、作家・佐藤春夫その他の芸術家・文化人との交流をもった。この人脈は後の「文化学院」創設へとつながっていった。

西村邸（現西村伊作記念館）周辺には旧宣教師館・チャップマン邸他、伊作と関わりの深い住宅が並んだ。今日でも一帯の竹まいから伊作の精神的遺産を感じとることができる。東京・神田駿河台に文化学院を開設するまでの約一〇年間、彼はこの「新宮の家」に住み、子どもを育てて住宅論を次々と発表して世間の注目を集めることになる。

『楽しい住家』は、「新宮の家」での実践を著したものであり、伊作の建築観・住宅観を代表するものである。I 私のこと、からはじまり、II 楽しい生活のため、III よい土地、IV 西洋風の家、V 設計、VI 構造、VII 外廻り、VIII スタイル、IX 内部、X 管と線、と続き、庭、門塀、装飾配置、ガレージ等々、自邸の写真やスケッチを用いて彼が実現させた住まい方の実際が懇切に記されている。西洋文化に浸ることがすなわち西村伊作の快樂、至福の時間の実現であったことが強く感じられる。

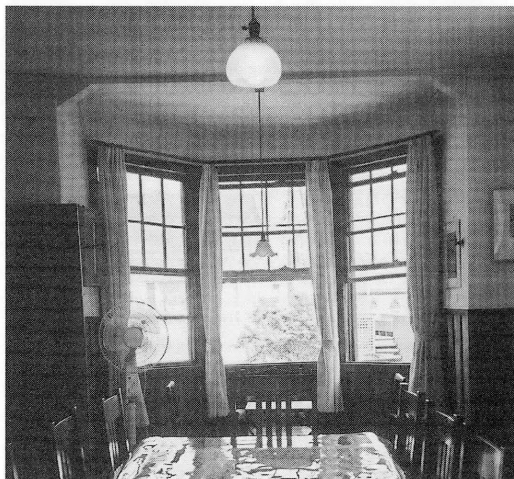
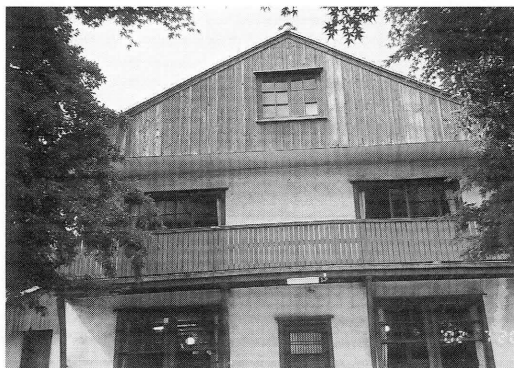


写真 現在の西村伊作記念館

都市設備の未整備な新宮の町で種々の制約を受けながらも上下水道、給湯設備を独自の工夫によって開発し、ともかく洋式生活を実行しようとする気迫が漲っている。理想生活と実社会の生活水準、価値観に大きな乖離が存在しても、あるいはそれを補完する代価がいかに大きくても妥協を拒み、家庭生活を洋風化させようとする彼の試みはいささかも揺るがなかった。

西洋風に暮らすこと、洋式生活の啓蒙、それらを生活改善に結びつける彼の姿勢は、最終章では新たな「理想村」の構想へとつなげられている。「私は経済的、社會制度的の理想はあまり持ちませんが、住居の様式生活の方法で、何か改革を試みたいと云う心が多いのです。だから新しい生活の村、新しい住家の村を作りたいのです。日本人がもっと新しい方法で生活し、愉快に、快活に、そして野卑でない生活、趣味ある生活の出来る模範を示すために、どこかへ新しい村を作りたいのです」という「理想郷」計画は紆余曲折を経て「文化学院」へと集約されていく。

一九二一（大正一〇）年、兵庫県・御影に「西村建築事務所」を設立し、建築活動を本格化させるが、この年に同時に「文化学院」を開設した。

芸術の薫りに包まれた自由で個性尊重の教育方針は、正規の女学校とは認定されなかったにも関わらず、知識人・文化人が自分の子を入学させることによって、その輝きを一層増していった。建築と

教育の両輪は美しい軌跡を残して進んでいった。

伊作の家庭での生活ぶりを長女・アヤは次のように記している。

伊作は、常に自分の生活を演出しつづけた。都会の富豪や、貴族のするようにはなく、アメリカから来ているキリスト教の宣教師たちのような質素な西洋式の生活を手本にし、それに、友人たちと一緒に作り出す創造的な芸術性を加えて行った。（中略）誰でも、と彼は当時の中流とそれ以上の人々を指すのだが、しようと思えばできるような簡素で楽しい生活の見本を先ず自分で示そう、そして日本を、世界の中で恥ずかしくない文化的な国にしたいという心だった。

宣教師の住まいを垣間見た幼い日々の原風景が、西村伊作の住宅観には投影されている。

五 おわりに

故郷宮崎で事業に行き詰まった橋口は、妻子を残して単身上京、そして横浜の英語学校に通った。横浜の町や西洋館を目にした彼は西洋の先進性に啓発を受け、一念発起してアメリカに渡った。アメリカで経験した生活様式、生活習慣が彼の住宅観形成の基礎となった。

ヴォーリズにおいては、当時の一般的アメリカ人としての知性や教養、宣教師としてのキリスト教倫理観、道徳観が住宅設計の指針となった。

西村伊作の住宅観は、熱烈なクリスチャンであった両親との家庭光景を原点にした。父もそうであったように西洋の生活様式の模倣を試み生活全般を彼好みに演出した。

橋口信助、ヴォーリズ、西村伊作の三人は、共通してアカデミックな建築の専門教育を受けてはいなかった。住宅に目を向けた出発時には三人ともが建築設計においてはアマチュアの域を出てはいなかった。しかし、三人は時流に乗ってその名は普く知られることとなり、彼らが近代住宅史に残した足跡は鮮やかである。

「あめりか屋」「近江ミッジョン」「西村建築事務所」がそれぞれの活動を活発化させた大正一〇年前後の絶頂期において、一方で公的機関による生活改善運動が開始されていた。

とりわけ文部省主導により一九二〇（大正九）年に設立された「生活改善同盟会」は具体的に住宅改善の方針を発表し啓蒙化を進めるものであった。その方針とは、

- ① 将来の住宅は漸次椅子座式にすべし
- ② 間取り、設備は在来の接客本位を家族本位とすべし
- ③ 構造、設備は虚飾を去り衛生・災害防止に重きをおくべし
- ④ 庭園は実用に重きをおくべし

⑤ 家具は簡單堅牢を旨とすべし

⑥ 共同住宅、田園都市の設備を奨励すべし

の六項目から成っている。これらを作成した生活改善同盟会の住宅改善調査会は建築界、教育界、言論界などの先導者をメンバーとした官的性格の強い組織であった。

すでに述べたように三人が提唱した住宅とはこのような住宅であった。橋口、ヴォーリズ、西村の三人は学術的、公的機関の動きからは離れたところで夢の世界を語り、時代の要求を覚醒させた。彼の発信した情報は、一般の人々に新しい時代の到来を自覚させ生活改善・住宅改良に対する意欲を湧かせたと思われる。

あらゆる生活面において古い価値観から脱皮して、新しい規範を示そうとした大正期の時代の空気は近代西洋の精神性すなわちプロテスタンティズムの影響を大きく受けるものであった。

注

- (1) 一九一五（大正四）年の国民新聞社主催の「家庭展覧会」をはじめとして、一九一七（大正六）年には住宅会社・あめりか屋の「住宅改良会」、一九二〇（大正九）年には文部省主導の「生活改善同盟会」、一九二二（大正一〇）年には農商務省の外郭団体「世帯の会」などが相次いで設立された。また一九二二（大正一一）

年、東京府主催の「平和記念東京博覧会」における「文化村」は新しい住宅のありかたに多くの示唆を与えた。

(2) 一九〇八(明治四一)年創刊。一九〇三(明治三六)年発刊の『家庭之友』を前身とし、男性中心の家庭ではなく夫婦による合理的な家庭の建設をめざした。一九三〇(昭和五)年に読者を組織して「全国友の会」をつくり、その理念啓蒙をより具体化した。

(3) 兵庫県出身。中村正直の同人社や津田仙の学農社に学び、一八八三(明治一六)年下谷教会で受洗した。妻は『小公子』の初訳で知られる若松賤子。

(4) 斉藤道子『羽仁もと子―生涯と思想』ドメス出版、一九八八年、七四頁。

(5) 注(4)前掲書七〇頁。

(6) 土屋元作『家屋改良談』一八九八(明治三一)。北田九一、岡本欽太郎らの「和洋折衷住家提案」一八九八(明治三一)。滋賀重列、矢橋賢吉、塚本靖らが提起した在来住宅批判は『建築雑誌』一九〇三(明治三六)誌上で開始された。

(7) 同誌における住宅関連記事の分析は、久保勝代「大正デモクラシー期の『婦人之友』誌にみる住生活改善」日本建築学会計画系論文集第四六一号、一九九四年七月。および「大正デモクラシー期の『婦人之友』誌にみる住生活改善(第一報)」日本家政学会誌、四三巻一二号、一九九二年一二月に詳しい。

(8) 吉田邸とウォーターハウス邸は一九一三(大正二)年に竣工。ヴォーリス邸は翌年竣工。ダブルハウス(二家族用住宅)は一九二一(大正一〇)年竣工。ヴォーリス邸は一九七六(昭和五一)

年取り壊されたが、他の三棟は現存しており市の観光案内にも洋風住宅街として紹介されている。

(9) 料理教室はやがて家政一般、英語、手芸などを教授する学校「家政塾」へと発展した。これらについては拙著『蒔かれた「西洋の種」宣教師が伝えた洋風生活』ドメス出版、二〇〇二年に詳しい。

(10) 山形政昭『ヴォーリスの住宅』住まいの図書館出版局、一九八八年、四七頁。

(11) 『湖畔の聲』は一九二二(大正元)年創刊の近江ミッションの月刊誌。『吾家の生活』は同誌上で昭和二年四月号より同四年の五月号に至るまでの二〇回が口述記録で連載された。

(12) 『湖畔の聲』昭和二年五月号、「吾家の生活」(二)二〇―二二頁。

(13) 同右昭和二年七月号、「吾家の生活」(四)二三頁。

(14) 同右昭和二年九月号、「吾家の生活」(六)一九頁。

(15) 前出(一四)と同じ。

(16) W・M・ヴォーリス『吾家の設計』文化生活研究会、一九二三年、八二―八三頁。

(17) 『湖畔の聲』昭和六年一月号、一四―一八頁。

(18) 二〇世紀初頭のアメリカの宗教教育運動の主唱者。宗教教育の社会的役割を主張した。

(19) 安達寿孝『キリスト教家庭教育の源流』新教出版社、一九八九年、一九四頁。

(20) アメリカから来日したカンバーランド長老教会派の宣教師J・B・ヘール(一八四六―一九二八)。

(21) 加藤百合『大正の夢の設計家』朝日新聞社(朝日選書)、一九九〇年、六九頁。

(22) 西村伊作『楽しき住家』警醒社出版、一九一九年、六〇七頁。

(23) 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師』東京大学出版会、一九九二年、三二頁。

(24) 前出(二二)、九頁。

(25) 『楽しき住家』一九一九、『田園小住家』一九二一、『生活を芸術として』一九二二、『装飾の遠慮』一九二二、『明星の家』一九二三年、三など。

(26) 前出(二五)、二五三頁。

(27) 前出(二一)一六二頁。

(28) 『N氏とその一家』の項から「石田アヤ、『熊野誌』第二四号、熊野地方史研究会、一九七八年。

参考文献

- 『楽しき住家』西村伊作、警醒社出版、一九一九年
 『田園小住家』西村伊作、警醒社出版、一九二二年
 『生活を芸術として』西村伊作、文化生活研究会、一九二二年
 『吾家の設計』W・M・ヴォーリズ、文化生活研究会、一九二三年
 『近江の兄弟』吉田悦蔵、近江兄弟社、一九二三年
 『吾家の設備』W・M・ヴォーリズ、文化生活研究会、一九二四年
 『失敗者の自叙伝』一柳米来留、近江兄弟社、一九七〇年
 『七一雑報』の研究』同志社大学人文科学研究所編、同朋舎出版、

一九八六年

『あめりか屋商品住宅―「洋風住宅」開拓史』内田青蔵、住まいの図書館出版局、一九八七年

『ヴォーリズの住宅―伝道されたアメリカンスタイル』山形政昭、住まいの図書館出版局、一九八八年

『羽仁もと子―生涯と思想』斉藤道子、ドメス出版、一九八八年

『ヴォーリズの建築―ミッション・ユートピアと都市の華』山形政昭、創元社、一九八九年

『住まい考今学―現代日本住宅史』西山卯三、彰国社、一九八九年

『大正の夢の設計家―西村伊作と文化学院』加藤百合、朝日新聞社、一九九〇年

『絵で読む子どもの社会史―ヨーロッパとアメリカ・中世から近代へ』アニタ・ショルシュ著、北本正章訳、新曜社、一九九二年

『日本の近代住宅』内田青蔵、鹿島出版会、一九九二年

『キリスト教と教育』竹内寛、山本書店、一九九二年

『キリスト教家庭教育の源流』安達寿孝、新教出版社、一九八九年

『西村伊作の楽しき住家―大正デモクラシーの住い』田中修司、はる書房、二〇〇一年

『消えたモダン東京』内田青蔵、河出書房新社、二〇〇二年

『ヴォーリズの西洋館―日本近代住宅の先駆』山形政昭、淡交社、二〇〇二年

拙著

- 『洋風生活浸透の一過程において宣教師が果たした役割とその活動に
関する研究』川崎衿子、日本女子大学博士學位論文、二〇〇〇年
『時かれた「西洋の種」―宣教師が伝えた洋風生活』川崎衿子、ドメ
ス出版、二〇〇二年